

## 歴史劇の現場から

### —新国立劇場『ヘンリー四世』の上演をめぐって—

リベラルアーツ研究教育院外国語セクション

教授 谷岡 健彦

2016年は、ウィリアム・シェイクスピアの没後400年に当たる年だった。このメモリアル・イヤーに上演する演目として、新国立劇場が選んだ作品が面白い。誰もが知っている四大悲劇の『ハムレット』や『マクベス』ではなく、歴史劇の『ヘンリー四世』二部作が11月から12月にかけて舞台にかかったのである。

端的に言ってしまえば、よその国の時代劇であるわけだから、日本での歴史劇の知名度は低く、上演機会もあまり多くない。しかし、本国イギリスでは、『ヘンリー四世』はシェイクスピアの全作品のなかでも、際立って人気の高い演目である。大酒飲みの巨漢フォールスタッフ、短気で向こう見ずな若武者ホットスパーなど、魅力的な人物が劇中に多々登場するからだろう。ほんの少しの予備知識があれば、日本人観客も肩肘張らずに楽しめる傑作だ。

そこで、新国立劇場での上演と時期を合わせ、この二部作の見どころを本学の学生や一般の演劇ファンにわかりやすく紹介する機会を設けられないかと考えた。古典と現代との橋渡しをすることは、4月に創設されたばかりのリベラルアーツ研究教育院のミッションにも適う。新装なった西5号館のレクチャーシアターで、さる12月5日に「歴史劇の現場から」と題したシンポジウムを開催したのは、このような思惑があったことだった。



北村 紗衣氏（武蔵大学人文学部専任講師）

パネリストには、シェイクスピアを専門とする研究者のほか、新国立劇場での上演に関わっているスタッフやキャストの方々をお呼びした。まず、お話しただいたのは、武蔵大学専任講師の北村紗衣氏である。北村氏は、シェイクスピアの戯曲を丁寧に読み込むだけでなく、舞台や映像作品にまで幅広く目配りを利かせている新進気鋭の研究者だ。生没年などシェイクスピアにまつわる基本的な知識から始まって、『ヘンリー



四世』という劇の構造にいたるまで、実に手際よく講義をしてくださった。とくに、1960年代にオーソン・ウェルズが撮った映画と、最近のテレビ作品を比較し、男女関係の描き方に大きな相違があることを指摘されたのが印象深かった。



三崎 力氏（新国立劇場、演劇制作）

次に、新国立劇場の演劇作品の制作を担当されている三崎力氏にお話をいただいた。三崎氏は、制作の仕事に就く前は、劇団で俳優をめざしていたらしい。そのころ、同じ劇団の仲間たちと、シェイクスピアの数々の歴史劇をコアとなる俳優の顔ぶれは変えずにまとめて上演してみたところ、個人を超える社会や時代が見えてきて、たいへん面白かったそうだ。俳優時代のこの体験が、三崎氏はいまでも頭を離れないという。たしかに、新国立劇場では2009年の『ヘンリー六世』三部作以来、2012年の『リチャード三世』、そして今回の『ヘンリー四世』と、定期的に歴史劇が舞台にかかっているが、いずれの作品でも浦井健治と岡本健一がライバル関係にある人物としてキャスティングされている。新国立劇場での歴史劇は、突出した個人というより、息の合った集団の力の産物として見てほしいとのことだった。

最後の講師は、俳優の下総源太郎氏である。下総氏は、もう30年近くも舞台の経験がある俳優だが、意外にも、シェイクスピアの劇に出演するのは今回が初めてだという。第一部では王に叛旗を翻す貴族ウスター伯、第二部では逆に王に忠実な家臣ウォリック伯を演じている。稽古が始まった当初、下総氏はシェイクスピアの台詞に戸惑うことが多かったそうだ。現代劇であれば、たった一言で済むような用件が、シェイクスピアの手にかかると、華麗な修辞の言回しになる。だが、下総氏はたんに台詞の長さの問題を言おうとしているのではない。異国の劇作家が400年以上も前に書いた台詞を、現代の日本人がただ漫然と口にしていただけでは、借りてきた言葉にしか聞こえないのではないかと案じ



下総 源太郎氏（俳優）

ているのである。与えられた役の名前から自由に想像を広げてみるなど、台詞を血肉化するために下総氏が凝らしている工夫が面白かった。

学内外から100名を超える聴衆がご来場くださり、当日実施したアンケートの回答を見るかぎりでは、おおむね好評だったようだ。先日発表された新国立劇場のプログラムによると、なんと2018年に『ヘンリー五世』の上演が予定されている。また同じようなシンポジウムを企画しようかと考え始めたところだ。